

小児肺炎球菌ワクチン



対象者: 生後2か月～5歳になる前日まで

肺炎球菌が原因で起こる病気

細菌性髄膜炎、敗血症、肺炎、気管支炎、中耳炎、副鼻腔炎、細菌性関節炎などの重い全身感染症を起こします。その中でも細菌性髄膜炎の原因の割合は、全体で肺炎球菌が約20%を占めています。

乳幼児では肺炎球菌の免疫が未熟なため重症化することが多くなります。

細菌性髄膜炎とその恐ろしさ

脳を包む髄膜に細菌が感染し、発熱、不機嫌、けいれん、意識障害などの症状を起こします。

細菌性髄膜炎の約10%が死亡し、約30%が後遺症(発達・知能・運動障害、難聴など)を残し、ヒブによる細菌性髄膜炎よりも重症です。また、肺炎球菌は乳幼児敗血症の大多数、中耳炎、肺炎の約30%の割合になっています。肺炎はウイルス性肺炎と違い大変重症で、中耳炎は耐性菌が多いので重症で治りにくくなります。

それらの感染症は病気の進行が早いので、ワクチンで予防することがもっとも重要です。

<予防接種スケジュール> ※接種開始の年齢で回数が決まります。

接種開始年齢	回数	接種間隔
【標準的な受け方】 生後2～6か月	4回	<p>*標準的には27日～56日までの間隔</p>
生後7～11か月	3回	<p>*標準的には27日～56日までの間隔</p>
1歳児	2回	
2歳～4歳	1回	

初回2回目の接種が1歳を超えた場合、3回目は行わない。2,3回の接種は2歳になる前までに行う。追加接種は1歳以降に行う

初回接種は標準的には1歳1ヶ月までに2回。初回2回目の接種は2歳になる前までに行う。追加接種は1歳以降に行う。